



書評：塩谷昌史著『ロシア綿業発展の契機　ロシア更紗とアジア商人』知泉書館、2014年2月、252頁

著者	高田　和夫
雑誌名	東北アジア研究
巻	19
ページ	149-156
発行年	2015-02-16
URL	http://hdl.handle.net/10097/59542

《書評》

塩谷昌史著『ロシア綿業発展の契機 ―ロシア更紗とアジア商人―』

知泉書館、2014年2月、252頁

高田 和夫*

Book Review: Shiotani Masachika, The Development of the Cotton Industry in Russia, Russian printed cotton and the Asian merchants, Tokyo: Chisenshokan, 2014

TAKADA Kazuo

著者が口絵にロシア更紗の見事なカラー写真数葉を配したことは、通例の経済史研究とは異なるものを目指しているという宣言あるいは意志表示でもあるのだろう。実際、著者は「帝政ロシアの工業化を従来と異なる観点から考察する」(5頁。以下、頁数は数字のみ表示)とその意図を率直に述べている。ここでは、前以て、結論部分(のひとつ)を引用するのがよいであろう。「モノ(文化)に対する人間集団の憧れは、革新の原動力になる。ロシアの場合、中央アジアの赤更紗への憧れが、近代的綿工業を確立する契機になった。」(233)つまり、本書表題の「契機」とはそうした意味合いのようである。せっかちな筆者などは、勝手にロシアとアジアの国際関係的な話なのかと想像したのであるが、どうもそれだけではないらしい。それにしても、「憧れ」が契機になるとはどういうことであろうか。人の気持ちがそうさせるというのならば、この場合のモノは単なる切っ掛けでしかないから、むしろ、議論の重点は前者をめぐる心理分析かとも思ったりもするが、叙述の基本はモノ(更紗)についてである。正直に申し上げて、筆者などはこのように入口で立ち止った次第。

そして、「憧れ」自体に対する解説あるいは理解の説明はなしに、「中央アジアの赤更紗への憧れ」なるものを、(1)モノ研究、(2)自然と人間、(3)西欧の相対化の三点を介在させて考察したいという(したがって、どうも、著者は「憧れ」そのものを研究するつもりはないらしい)。(1)は本書で主たる対象としようとするロシア更紗にまつわる生産・流通・消費の一連の過程を分析するもので、これが本書叙述の主要部分を構成するが、著者は従来のロシア経済史研究では

*九州大学名誉教授

生産面に力点がかかって、流通や消費の側面は軽視されてきたと強調している。なるほど、言われてみれば、そのようであるかもしれないが、研究史に対する著者独自のサーヴェイがないのはやはり気にかかる。たしかに、流通や消費も経済史の対象たるにふさわしいことはその通りであろう。とくに消費に関わることであろうか、著者は「ロシア経済史で軽視された綿織物の品質や用途に着目し、異なる観点からロシア綿工業史を再検討するなら、見過ごされてきた帝政ロシアの工業化の特徴を把握できる」(16)と意欲的である。

(1) に対する分析作業は、(2) と (3) とによって彩られる構造になっているように読める。しかし、それらは、更紗とは違って、いわば実態を持たない別のレベルのものであるゆえ、著者がそれらを用いて独自の主張をしようと努力しているのは伝わるが、少なくとも評者にとっては、いささか分りにくい感想を、(1) と (2)・(3) との関係 ((2) と (3) の関係はひとまず問わないが) について、前以て述べなくてはならない。このことと直接に関係するかどうかはひとまず脇に置くが、自然を言って、国境など人為的なものを後景に斥けて議論しようということなのかかもしれない。それにしても、歴史研究では「国境を越えた領域は通常、対象から除かれる」(13) というのは、果たしてそのようであろうか。今も関係論や関係史が盛んなことを思えば、これはもう少し説明されたほうが、読者に対して親切であろうなどと思われる。(1) と (2) を併せると、「モノから見る、自然と人間の関係」になるのだろうが、著者はそうしたことを考えてみたいと長く思われていたそうで (15)、本書はそれを果たす場になったということでもあろう。次のような箇所はより丁寧に課題の設定を、とりあえず (1) と (2) について、説明しているのかもしれない。「企業家による綿織物生産、商人による綿織物取引、消費者による綿織物利用を、可能な限り資料に基づき検証し、綿織物を通じて諸地域間の関係や、自然と人間の関係を考察する。」(30) ここでは「モノから見る」部分が企業家、商人、消費者の三者のヒトの活動に言い換えられ、これが具体的な記述の手がかりとなる。そのように読めば、モノだけでなく、ヒトも重要であると著者は考えていられるのであろう。こうした理解でよろしければ、本書でヒトについて (も) どれだけ描けているかが問題となる。少なくとも、これら 3 者 (企業家、商人、消費者) がそれぞれ、モノ (この場合、更紗) を通じて、自然とどういう関係を切り結んだかということについてである。しかし、勝手な想像を重ねたうえで結論的な感想 (のひとつ) を述べるのは誠に申し訳ないことなのだが、どうも議論がここでいう自然にまで未だ及んではない印象を受けた。そうしたことは著者の内に秘めておくのがよかったのかもしれないが、これ以上、こうした話はよしにしよう。

(3) については、次のようなコメントを参照すべきであろうか。「21 世紀に再び成長の中心がアジアに回帰する経路が想定できる。この経路でアジアの過去の繁栄と現在の繁栄を結び付け、近代ヨーロッパを相対化すれば、西欧中心史観と異なる世界史が構想できる。」(20) しかし、問題の「近代ヨーロッパを相対化すれば」を間に挟む、最後のセンテンスは、やはり評者には分りにくい。たとえば、21 世紀にアジアが復興しなければ、(3) 西欧の相対化はできないということなのか。一般に、西欧の相対化ということはそうしたものとして語られてきたのか。もう少し

し、かみ砕いた説明がほしい。さらに、追いかけるようにして、「ロシアと中央アジアの関係を再検討する際、近代ヨーロッパの相対化という観点は重要になる」(21)とも言われる。「西欧とアジア」という関係論と、「ロシアと中央アジア」という関係論との間には、おそらく大きな段差が様々にあるはずで、単純な併記では済まないように思われるが、いかがなものであろうか。これらに関する説明は本書の別の場所に探さなくてはならないのであろうか。

著者は、従来のロシア経済史研究を「連続説」と「断絶説」に分けて整理して、前者を自らの立場に選んでいる。このレベルの議論は評者など第三者が口を挟むまでもないが、研究史などの押さえ方については、触れる必要を感じる。まず、先行研究への言及が不足している。ロシア経済史研究をロシコーヴァに代表させるような書き方（少なくとも、評者にはそのように読めた）はいかがであろうか。先行研究をまとめて取り上げる場所を設けなかったことが、そうした印象を読者に与えることになった面もやはりあるのだらうから、もう少し工夫があってもよかったのではないか。「現在を含め、ロシア史研究で数量データは軽視される」(25)という断言はどうであろうか。たとえば、邦語文献でも、長期人口動態を統計資料解析で究明する試みとして、雲和弘『ロシア人口の歴史と現在』(岩波書店、2014年)といった仕事も出るようになった（もっとも、これは本書と同時期の刊行であるから、事例としては余り適当ではないかもしれないが）。ただし、帝政ロシアの情報収集力の高さに関する指摘(25)には大いに同意する。その際、大蔵省、軍部などの中央機関だけでなく、地方（総督府や県など）における当該能力の高さにも注目すべきであろう。後続の研究者たちにはそれらの活用が望まれ、かつ求められているであろう。

著者がいわゆる「唯物史観」に拘る姿勢を見せたのは、正直に申し上げて、いささか驚いた次第である。さしあたり、今更といった面と世代的な「若さ」といった面の双方においてである。「本書では、唯物史観から離れ、モノ（商品）を通じて、人間と自然の関係を考察する。その際、従来、見過ごされてきた流通や消費の領域に焦点を当てる。」(26)とも課題の設定を言い直している。いずれにしても、モノにこだわるということでは、唯物論に相違ないであろう。

導入部に関して、さらに述べておく。どうしても、もう少し書きこんだ方が読者に対して親切であろうと思われる箇所が目につくからである。

27頁の注記に「帝政ロシア像を書き換えようとした代表的文献は次の通り」とだけ述べて、例のミローノフの社会史を挙げているが、これなど、どういう意味合いで「書き換え」なのか、一言あってしかるべきであろう。そうすれば、読者は著者が帝政ロシア全般に対してどのようなイメージを抱いているのか、大いに参考になるだろうからである。

「ロシア史研究で定期刊行物の利用は、研究の盲点になっている」(28)そうだが、そうであるかもしれないし、そうでないかもしれない。少なくとも評者などは俄かには断言できない。ただし、研究者の多くは普段から定期刊行物の存在には大いに注意を払っていると思われる。

公文書（いわゆる、アルヒーフのことであろう）の利用についても言及があり、著者は近年の「依存傾向」にも触れて、研究の細分化、あるいは「郷土史化」を嘆いているかのように読める。アルヒーフは必要に応じて利用することをもって一大原則とするだろうから、ここで多くを述べ

るまでもないが、そうした原則を無視して、ただ、形式的に（真の必要性なしに）アルヒーフを使ってみたとしても、そうした行為によって作品の評価が上がることは期待できない（場合によっては、逆効果でさえあろう）。たしかに、アルヒーフは資料的に細部を示すことがあり、その結果、いわれる細分化をもたらすおそれはやはり否定することはできないであろう（同時に、それは研究者としての主体性が試される局面でもある）。ただし、ここではそうしたことを著者がするように「郷土史化」と換言することには、郷土史研究のためにだけ言うのではないが、評者としては個人的に違和感がある。右で言う細分化をそのように置き換えているのかもしれないが、そうであれば、適当な喩えではないであろう。

著者が帝政ロシアの構造変化や長期変動を明らかにする研究に「ロシア人研究者が取り組みにくい」として、日本人（あるいは外国人？）研究者がそれに「挑むべきである」（30）という箇所も分りにくい。なぜ、ロシア人研究者がそのような状態にあるのか、そして、日本人がそうすべきであるのか、これらについてもさらに丁寧な説明が要るように思う。ミローノフの仕事などはそれに該当しないのだろうか。日本人はそれを可能にするような特殊な能力を持ち合わせているのか。おそらく、こうした設問は不毛のはずで、研究は、何人に拘わらず、普遍的な個人が行うことであろう。

長くなったが、導入部に関して、最後につぎに触れておく。31頁で、著者は「モノ」研究と経済史の方法を併用し、19世紀前半のロシア綿工業が発展した要因を再検討し、帝政ロシア経済の構造変化を明らかにすると最終的な（？）課題設定を行っている。したがって、これによれば、話は単に綿工業ひとつに限らず、経済構造全般にまで考察対象は拡張されることになるが、本文を読む限り、帝政ロシアの経済構造全般に関する議論（工業に限らず、農業など他部門、経済的なウクライナ論、ロシア資本主義論、ロシア経済全般に占める綿工業の位置、など）はないようだから、構造変化云々は今後の仕事に期待することになるのであろう。

さて、本論であるが、すでに触れたように、生産、流通、消費の各局面を順に分析している。更紗といったひとつのモノをこのように一連の過程を通して考察しようとしたところに、本書の最大の特徴と利点があるといつてよいのであろう。

生産局面については（第1章「ロシア綿工業の発展とアジア向け綿織物輸出」、第2章「ウラジーミル県（イヴァノヴォ）における更紗生産の発展―染色工程が牽引する工業化」）、さしあたり、次の諸点に触れておく。ロシアの工業製品を輸入した唯一の地域がアジアであったことが強調されているが（44など）、ここでいうアジアは狭く中央アジアなど限られた一部の範囲についてであり（ロシアの工業製品は広くアジア全般を相手にするほどの力量を持ち合わせていない）、著者は現地の消費嗜好（更紗のデザイン、色彩など）に対する配慮がそれを可能にしたと指摘する。評者にはこうしたことは辛うじて起きえた奇跡のようにさえ思われる。著者は、なぜロシア製品はアジア（中央アジアなど）の消費者に支持されたのかを考えて、ロシア中央部のヴラジーミル県（イヴァノヴォ。つまり、将来的に「ロシアのマンチェスター」などと称されることにな

るロシア綿工業の中心地)の更紗生産で消費に密接な関係にある染色と流通に注目する。染色業が牽引した生産工程の革新について触れられ、アジア方面で先行した技術をロシアが自らのものとして、その成果(製品)をアジアへ出すプロセスが指摘される。この辺のところは、関連資料の利用を含めて、著者による貢献が大きなところであろう。そして、生産過程の話を次の(流通分野)に繋げようとする工夫がなされているようにも読めた。

ただし、細くなるが、生産を扱うこれら第1章と第2章で気付いた点に触れる。利用した資料として、『ウラジーミル県新聞』をあげている(63)。これは、Владимирские Губернские Ведомости のことであるが、いささか気になったのは、その「新聞」という訳語である。知られるように、ロシア政府は1838年にツァーリが裁可して、公的ないわば県別広報誌の発行に踏み切った。いわゆる Губернские Ведомости である。ふつう、その構成は公式と非公式の二部門に分かれ、後者が個別県事情を扱うことが多く、研究者たちによって読まれてきた資料であり、著者が利用したのはそのウラジーミル県版である。したがって、いわゆる新聞ではないので、評者などは『県報』などとしてきた。保守派の代表的な新聞 Московские Ведомости は我が国のロシア史研究者たちによって『モスクワ報知』と訳されてきたから、それにあわせると『県報知』なのだが、落ち着きが悪く、『報』だけを借用したのである。この場合は、『ウラジーミル県報』である。もはや趣味の世界のような話で、早々に切り上げることにするが、ご検討いただければと思う。

68頁で、ロシアの農奴解放を、括弧をつけて1860年としている。24頁でも同様であるから、そのように記憶されてしまったのであろう。ここでは、指摘だけに留める。59頁の図表の注3におけるロシア語表記は対格ではなく、主格のほうがよいのではないのか。

流通の局面では(第3章「ニジェゴロド定期市における綿織物の取引」、第4章「アジア商人の商業ネットワークとロシアの綿織物輸出」、ニジェゴロド定期市がロシアとアジア間の流通のハブであったことが示される(103)。つまり、「アジアの結節点としての」その位置についてである。正直に言って、従来、評者などは、国内に目が向きがちであったから、これらの指摘は貴重である。流通では、アジア商人の商業ネットワークを通じたロシア綿織物輸出を取り扱う箇所が、本書における中心的な部分のひとつで、なおかつ優れているところであろう。(1) アルメニア商人のペルシア市場、(2) ブハラ商人の中央アジア市場、そして、(3) 山西商人のキャフタ市場の3つが順に取り上げられる。(1)ではロシア側の中心になったのはチフリスであり、ペルシア側はタブリーズであった。帝政ロシアは19世紀初頭、グルジアを併合して、カフカース一帯に対する関与を本格化したが、その際の、チフリスの多機能性をうかがわせる局面のひとつとして、評者はここでの紹介を興味深く読んだ。

3つのうち、(2)が筆者の議論にとって重要である。著者の書き方もそのようであろう。19世紀前半、帝政ロシアでいわゆる初期工業化が進行して、中央アジアとの関係に逆転が生じたことが強調されるからである。つまり、「19世紀にブハラ商人は中央アジアからロシアに棉花を運

び、ロシアから中央アジアに綿織物を運んだ。」(149) いずれにせよ、(3)を含めて、ロシア製更紗の輸出に近隣商業圏の商業ネットワークの活用がなされたことはよく分る。まず、事実関係として、著者はそうした事態に目を向けるように読者を促すことには成功している。

そして、これらをまとめて、著者は次のように語る。「19世紀全体を俯瞰すると、アジア商人が媒介するロシア製綿織物輸出のメカニズムは、ロシア社会が自然環境に依存する状況から離れていく時期に現れた、過渡的な形態であった。」(161) ここで、評者はよく分っていないからであろう、以下、見当はずれかもしれない疑問（というか、質問）を敢えて呈する。問題は、このセンテンスの前半と後半の関係についてである。「自然環境に依存する状況から離れていく」というのは、工業化するということであろう。結語部分に、「ロシアの初期工業化は、自然環境からの解放を意味した」(225) とあるから、そのような用語法を著者は採用しているからである。初期の工業化とともに綿織物が中央アジアへ外国人商人の手を借りてでも輸出できるようになったが、そうしたことが「過渡的な形態」であるというのは、引き続き本格的な工業化によって、別の形態が登場する（はず）ということになるのだろうか。そういうことならば、本書における議論は、いわば過渡的、一時的な様相を描写するに留まっていて、本格的な工業化（著者が本書で何度か言及する19世紀後半のロシア産業革命）の時期に関しては、今後、改めて、研究する予定であるということなのだろうか。

最後の消費の部（第5章「アジア綿織物市場におけるロシア製品の位置」、第6章「ロシア製綿織物と服飾文化の変容」）が、評者にとっては最も興味深かった箇所であろうか。まず、綿織物を一様な製品とはみなさず、「多様な製品群」(166)として取り扱うことが宣言される。「輸出される綿織物の種類は地域により異なった」(167)ことは、なるほど、そうするに決定的な要因であろう。当然と言えば、当然のことなのであろうが、こうしたことは具体的に資料にあてないと分からない事柄であり、そのために行った著者の努力は評価されるべきであろう。ロシア側の消費者の嗜好に合わせた製品作りと現地の慣習に対応した販売方法が、特に、ブハラとキャフタの市場で成功したことが示される。それは、おそらく、ロシア企業家たちは市場調査活動まで行った結果でもあるだろう。しかし、タブリーズ市場（ペルシア）はロシアには馴染みのないインド更紗の世界で、販売はあまりうまく行かない。

知られるように、更紗はインドを起源としている。そこから、世界各地に伝播した。それを日本の専門家たちは「渡り」というらしい。インドネシア渡り、チベット渡り、ペルシア渡り、ヨーロッパ渡りなどという。それでは、「ロシア渡り」というものはあったのだろうか。あったとすれば（いや、なかったとしても）、著者は更紗を通じたモノ研究を謳っているのだから、ロシア更紗の系譜性や独自性について、さらなる議論があってよいように思われた。更紗がインド起源であるかぎり、ロシア更紗にとってもインド更紗が馴染みのないものであったとも思われな

い。

「アジア製織物に表現された模様や色合いが、ロシアの捺染更紗の基調となる」(196) という

のだから、そのことを図版で示し、解説してほしかった。衣装の紹介は口絵カラー写真でよくなされているが、ここでいう「模様や色合い」についてである（ただし、評判が高かったとされる赤更紗クマーチは、口絵 10 に示されている）。更紗のモノとしての魅力（憧れ）は、まずそうしたところにあるはずだからである。「アジア風模様を直接借りるのではなく、ロシア風アレンジした」などといわれれば、なおさらのことである。「ロシア渡り」論のさらなる充実を期待したい。

このレベルの問題は、本書にとって、本質的ですからあるようにも思われる。中央アジア製の赤更紗を憧れの商品として、それを輸入代替したいという願望が帝政ロシアに初期工業化をもたらし、いわば憧憬が革新の原動力になったとまで指摘されるが（228）、ここで言う「憧れ」や「願望」を誰が抱いたのか、具体的な説明に欠けるのではないか。ロシア農民にとって赤と白は特別な意味合いを有した色であるという指摘があるが、そもそも（赤）更紗は農民の間にどれほど普及したのだろうか。この憧れはどの部分の人たちのそれであったのだろうか。「モノ（文化）に対する人間集団の憧れ」（231）と一括されるのだが、それだけのことならば、別にロシアだけに限わる話ではないであろう。一部の有意な企業家による経営革新が赤更紗を自家生産することになったのではないのかなどと想像だけを逞しくして、本書を読んだ次第である。

